

木曜正午

昼休み

趣味で描いている百合漫画がバズった。バズったと言っても何万もいいねやリツイートがもらえたわけではない。けれどずっとフォロワー百人前後の無名アカウントからしたら、憧れの百合絵師にリツイートどころかフォロバまでしてもらえて、五百以上いいねとリツイートが来てフォロワーが一気に増えたのは、アカウント開設以来初めてのバズだ。

数件来ていたコメントは、「リアルで素敵ですー」というものが多かった。これには驚きつつも納得している。

うららちゃんと赤羽さん。同じ漫研に所属している二年生だ。うららちゃんは地雷系の可愛い子で、赤羽さんは地味で今一何を考えているのかよくわからない、大人しい人。二人は結構距離が近いから、裏では百合だ何だと騒がれることが多い。本人たちは知らないだろうけれど。

昨日バズった漫画は、そんな二人がある日交わしていた会話を何気なく落書きにしたものだった。高校の頃からだから六年くらいは描いているけれど、ある日突然こうしてバズるんだから、人生とは何が起こるかかわからないものだ。とにかく百合大権現の二人には感謝している。どこに住んでいるかはわからないけれど何度も手を合わせた。

今日も漫研に出て二人の会話を盗み聞こう、と思いながら生協の横を歩いていると、

部室棟の階段を下りていくうららちゃんと赤羽さんが見えた。これは逃すわけにはいかない、逸る気持ちをどうにか抑えながら、二人にばれないようにそっとついて行く。階段を下りて、部室棟を出て、ぐるっと裏へまわる。

この先って……まさか喫煙所？ 使ってる人はあんまりいないから、もしかして二人きりで何か……こんな秘密の薔薇園、いや百合園を覗かずにいられようか！ 見つからないようにそっと近付いて、神経を研ぎ澄ませる。

「いや本当に劉先生の言ってることは意味がわからん、内容云々じゃなくあいつの喋る日本語が理解できんのだが」

紛れもなく赤羽さんの低い声だ。あれ、でも赤羽さん、いつも敬語で話してたような……。

「中国語喋ってても全然理解できねえんだよなあ、あーあ……日亜文化比較が一番嫌いだわ」

こっちはうららちゃん。え、うららちゃんっていつもはもっと女の子みたいな喋り方してなかったっけ？ 別人？ 声は確かにうららちゃんんだけど、口調が……。それに一瞬火が燃える音が聞こえて、すぐに消えた。え、二人とも喫煙者なのか？

「冗談抜きで講義中船漕ぎまくり意識飛びまくりよ、来週はぜってーサボるわ」

「え、ずる、俺もサボりてえんだけど」

『俺』？ うららちゃん、裏では一人称『俺』なの？

「サボりゃあいいじゃん」

「やだよ、あいつ俺がハーフで中国語できるからって目つけてんだもん。それにサボったってどこ行くんだよ」

「え……池袋に新しくできたラブホ？ 女子会プランで二時間スイーツ食べ放題らしいよ」

「ヤバ！ Twitterで見て気になってたところんだけど！ えっ行こうや今からでも」
「やだよ昨日一晩中遊んで疲れてるし……お前絶対二時間スイーツ食うだけじゃねえじゃん、いっつも結局セックスするだろ。泊まるうにも潮でシーツぐしやぐしやになるし」

「だって月子上手すぎるんだよー、ねえ最近行っていないじゃん、新しいホテル開拓しに行こうよお」

木曜正午 昼休み
えっえっ、えっ？ 二人、えっちすんの？ えっ？ リアル百合？ もっとちゃんと話を聞かないと、と前のめりになりすぎてバランスを崩し、喫煙所の衝立に大きな音を立てて手をついてしまった。物音に驚いた二人が同時にこっちを見たけれど、驚いたよ

うな表情はすぐに立ち消え、うららちゃんのゴミを見るような視線が突き刺さってきた。

「……宮野、先輩」

最初に僕に近付いてきたのは赤羽さんの方だった。

「あ、え、あ、っと、ご、ごめん、盗み聞きましたかったわけじゃ……」

「どう見ても盗み聞きでしょう」

赤羽さんの短い一言。はい、そうです。盗み聞きです。言い逃れできません。

「何のためにこんなことしたんだよ、おい」

うららちゃんが赤羽さんの後ろから飛び出し、今までに聞いたこともないような荒々しい口調で僕に詰め寄ってくる。逃れようと後ずさっても背後は壁で、忌々しそうなうららちゃんは今にも殴りかかってきそうだ。

今までにないくらいうららちゃんの顔が近付いたけれど、心臓がドキドキしているのは顔が近いからじゃなくて胸倉を掴まれているからだ。人生で初めて、こんなに漫画みたいに胸倉を掴まれた。長い睫毛に綺麗な黒い目で、今にも飛びかかってきそうな犬みたいに睨んでいる。もうこうなったら、素直に言うしかないだろう。早く謝れば許してくれるかもしれない。

「ごめんなさい！ ま、漫画のネタにしようと思ってたんです」

「漫画のネタあ？」

ヤンキーのように顔を歪ませて詰め寄ってくるうららちゃんを赤羽さんが制した。ようやく解放されて息ができるようになった。た、助かった……。

「どういう意味ですか、それ」

全部、白状した。百合漫画を描いていること、二人を題材にした百合漫画が初めてチバズったこと、二人をまた漫画のネタにしようと思って後をつけてきたこと。うららちゃんは終始キレ顔だったけれど、赤羽さんは冷静に僕の話聞いてくれた。

「ハァ?! それでうららたちの会話聞いてたわけ?!」

「まあ、創作で評価されるのが嬉しい気持ちはわかるからなあ……」

「ねえ月子はどっちの味方なわけ？ こいつさっきの話聞いてたんでしょ？ 殺すかねえよ」

ああ、でもうららちゃんがそういう反応をするのは無理もないよな。あんな会話、聞かれたら恥ずかしいし。

「ご、ごめんなさい、二人が付き合っているとは知らなくて……」

「付き合ってますんよ」

「ちょっと月子！」

今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ、と咎めるうらちゃんは、僕に対する態度とは明らかに違う、優しいような甘えるような声だ。

「とにかく許せないのはわかるけど、どうにか暴力以外で解決してくれないかな。ね、先輩。とりあえず漫研にあることないこと流しまくって居場所をなくす、くらいいいですか？」

「あ……いや、それは……ごめんなさい、何でもしますからッ……」

漫研に居場所がなくなったら、僕はもう本格的に行き場がなくなってしまう。

どれだけ服装に気を遣っても、どれだけ見た目を普通の人間に近づけようと、結局内面はオタクのまま変われない。そんな僕が漫研を出てしまったら、大学内で友達を見つけてようと思ってもどう話せばいいか、なにをすればいいかまるでわからない。高校までずっと一人ぼっちだった僕が唯一見つけられた居場所なんだ。

木曜正午 昼休み

うららちゃんは僕と赤羽さんを交互に見ていた。赤羽さんは相変わらず心ここにあらざうというか、どうでもいいような態度で僕のことを正面から見据えている。彼女は怒っていないようにだけれど、僕は正面からじっと見続けられることに耐え切れなくなり、視線を下に落とした。

「月子はどうやってケジメつけさせるつもり？」

「え？ いや、何も？ ちょっと漫画描いたくらいでバズったんなら才能はあんでしょ、わたしは創作で認められる気持ちわかるからあんま強く言えねえよ」

「ねー何で擁護するのさあ……」

「あんたが許せないなら自分で罰を決めな。わたしはどうだっていいよ」

赤羽さんは心底どうでもいいような口調でそう返し、僕達の間には再び沈黙が訪れた。

「……先輩、奴隷になってください」

「え」

戸惑いを隠せず顔を上げる。

「月子の」

「えっ？」

今度は僕じゃなくて赤羽さんが困惑の声を上げた。

「どういうこと、うらら」

「謝罪や金品じゃ解決にならないでしょ、こんなの。あたしは今でも一発殴らないと気が済まないし、あんなこと聞かれたなんて……一応これでも冷静に考えた妥協案だから」

ら。先輩は月子に奴隷として使われて、その代わりあたしたちのこと描いてもいい。別にずっととは言いませんよ、一週間くらいで許してやってもいいし」

奴隷、の二文字が脳内に暗雲のように立ち込めた。奴隷って一体……？ 謝罪やモノじゃ解決にならないと言ったということは、肉体的な話だろうか。奴隷、と聞いて浮かんでくるのは、好きな百合絵師のSMイラストだ。ラバーを着た女の子が、女王様に電マやバイブでいじめられたり、四つん這いになって「お馬さんごっこ」をしたり。

もしかしてそういうことだろうか？ そう考え始めると心臓がドキドキして仕方がなかった。そうじゃない可能性の方が高いだろうけれど、ない噂を流されて居場所がなくなるよりはずっとマシだ。それに漫画のネタもできるし、と思ってしまふ僕は馬鹿だろうか。

「……いいよ、わたしは。うららの気が済むようにしてあげる」

含みを持ったような赤羽さんの返事。何か策があるんだろうか、怖いからあまり想像したくないけれど、どこか期待しているような自分もいる。

「ぼ、僕も……それでいい、です」

「決まりね」

うららちゃんはそれだけ言い残すと灰皿の近くに戻り、「火が消えちゃったじゃん」と

言いながら二本目の煙草に火をつけた。僕は……どうしたらいいんだろうか。とりあえずここにいていいんだろうか。

「そういえば先輩、ご飯食べましたか？」

沈黙が破られたのは赤羽さんが僕にそう訊いてきたからだ。講義が終わってからすぐ二人のことを追ってきたから、そういえば昼飯がまだだ。自覚すると途端にお腹が空いてきて、生協で何か買えばよかったと少し後悔した。

「いや、まだ食べてなかった」

「じゃあ買ってきてくれませんか、わたしとうららの分」

そう言いながら赤羽さんはポケットに入っていた財布から千円抜き出し、僕に手渡した。

「何でもいいです」

「あ、う、うん」

そうだ、僕はついさつき赤羽さんとうらちやんの奴隷になったのだから、このくらいはやって当然だ。お金をもらえただけありがたいだ。うらちやんはまだ怒っているのかこっちを見ないけれど、何も言わないということは彼女も食事がまだなのだろう。

「じゃあ、わたしたちはここで待っています。すぐに戻ってきてください」

できる限り早足で喫煙所を去る。この大学には喫煙者が少ないのか、ここまで誰も喫煙所に来たり途中の道ですれ違ったりしなかった。うららちゃんと赤羽さんは、いつも二人だけで誰にも邪魔されずにあの喫煙所にいるのだろうか。沢山の人がいる大学で、漫研の紅一点（二人だから二点か？）が二人きりで秘密の会合を……。考えただけで興奮してきてしまうのは僕が百合好きだからだろうか。

とりあえずメモしよう。歩きながらスマホを見るのにも、もう罪悪感を覚えなくなつた。今日の会話、奴隷になつてくさいと言つたうららちゃんの顔、僕の想像もつかないような大きく恐ろしいものを隠しているような二人の雰囲気……メモに起こしているうちに新しい漫画のイメージが固まつてきた。

もしかしてこれ、中々悪くないのでは？ 奴隷といっても今の所はあまりハードなこととか、僕が想像していたようなことをさせるようには感じられないし、この程度の犠牲で漫画の評価が上がるなら安いものだと思える。

生協のラインナップはコンビニのそれとよく似ている。二人分多く買い物をしているから周りから変な目で見られているような気がするけれど、できる限り気にしないように頼まれたものを探し出してはかごに入れていく。言葉に従わされる方がずっと気持ち